

切られた羽

瀬戸 真朝

——その事実気付いた時、頭が真っ白になったのをよく覚えている。

カレンダーを見て、計算してみた。するともう四週間以上、来ていなかった。

横で眠る彼に、言える言葉なんてなかった。

——彼は中学生で、名前さえも知らなかった。

呼びやすい様に、「ミー」と呼んでいた。小さい頃に少しの間だけ飼っていた猫の名前だ。

——始まりは、都心にある大学からの帰り道だった。

大学がある街では、シャツターの閉まった店先などにホームレスがよく横たわっていた。時々、息をしないかのように無造作に転がっていることさえもあった。

そしてその横を、高層ビルで働く会社員たちが何もないかのように通り過ぎて行く。そんな街に、私はいた。

——そして彼も、電車のガード下に座り込んでいた。年末近くで、いくら都心でも耐え切れないぐらい寒い晩だったのもあり、夜も遅くにこんなところにいる少年が気になって、つい話しかけてしまった。

そして一度話しかけると情が移り、ほっとけなくなってしまう。大人っぽい顔立ちで、まさか中学生だとは思っていなかったが、その場のノリでそのまま家に連れて帰った。

「ペットだと思って、僕を置いてよ」

そう言われ、考えるのも面倒になって付けた名前がミ

ーだった。

——そうして彼は、私のペットになった。

一人暮らしをしていた私にとって、帰ってきたら誰かがいることに、安心感が生まれた。

つい家を空けがちだったが、ミーにご飯を与えるために家へ駆け足で帰ることも多くなった。

猫はずっと好きだった。けれどここは都会によくあるペット禁止の物件だった。

だけどミーなら、大家さんも怒りはしない。

お互いのことは詮索しないのが暗黙の了解だった。

彼が中学生だと知ったのは、どこからか中学の制服を持ってきて見せてくれたからだ。

時々家を空けてどこかへ行っているみたいだったが、学校には殆ど行っていない様子だった。

寒い晩に寝ていると、ミーは時々布団に入り込んでくることもあった。そしてそのまま戯れることもあった。高校生か、それ以上にも見えるきれいな顔だったが、そんな彼が無心に甘えてくるのを見て、やっぱり中学生なのだと思った。そしてその様子をおかしいと思っていた。

かわいい。そのままの意味だった。ミーは私にとってかわいかった。それだけだった。今は幸せだったら、それで良かった。この穏やかな日々が続けば。

家族をろくに知らない私にとって、ミーの存在は温かさに満ち溢れていた。

——一人暮らしをする以前から、私は家で一人だった。殆ど帰って来ない両親の離婚話が高校卒業と同時にやつと片付き、一軒家を売って自分はアパートを借りた。実家にいた頃から、家に帰ってきた私を待っていたのは、毎月送られてくるお金ぐらいだった。

寂しかったのもあって、小学校の低学年ぐらいの時に子猫を拾ってきたこともあった。よくミーミーと鳴くから、「ミー」と名前を付けた。

一週間ぐらいの間は一緒に眠ったりしていた。けれど、その頃から家を空けがちだった父が酔って帰って来た夜、「猫の声がうるさい」と言っ、ミーを掴んで外に出て行ったことを覚えている。

酔った父が恐ろしかった私は布団の中にいたが、その夜から猫の声は聞こえなくなった。

それからしばらくして、近所で猫の惨殺体が見付かって話題になった。母が家に帰らなくなったのもその頃だった。

それ以来、どんなに懐いてくる猫がいても連れて帰ることはしなかった。

「うちに来ても、幸せになれないよ」

足に擦り寄ってくる猫にそう言っ、立ち去ることしか出来なかった。苦しむのは私だけでいい、と。

——あの頃、私は体から青痣が絶えることのない子どもだった。

だから、今感じているこの幸せを手放したくなかった。いつか終わりが来ると分かっ、今はまだ嫌だった。ひとりになりたくなかった。

ただどいくら待っても望んでいた兆候は訪れず、自分の体の変化に気付くしかなかった。

かわいいだけの彼に出来ることなんて、何一つないと

分かっていた。だけど、産みたかった。いつまでもミーがそばにいる訳じゃないことは分かっていた。ずっと一人で生きるのは、もう嫌だったから。

けれどミーには言えなかった。出て行ってしまおうのが怖かった。それに、彼は中学生だった。もし彼の両親が警察に行けば、私は誘拐犯になってしまう。十八歳さえも過ぎてない彼に出来ることなんて、私に向かつて笑って、ご飯をおいしそうに食べて、時々夜に戯れたりすることぐらいだった。分かっていた。分かっている。だけど。

もちろん、大学を辞めて自分が働くという選択もあった。だけど、バイトさえも今までのことがなく、社会に出るのを未だに怖いと思ってしまいうちに、出来るとは思えなかった。

よく言う友達という存在もいるにはいたが、授業の合間に世間話をするだけのようなグループにいただけだった。人と深く接するのは苦手だった。けれどどうしたらいいかも、分からなかった。

そうやって将来を一人で考えているうちに、段々と自分のお腹にいるその存在が重荷に思えるようになった。

——この中にいなかったら、こんなに悩まなくて済む

のに。

そう思いながら腹部を見下ろすと、無性に苛立った。そしてミーがいない時に腹部を力強く殴っていると、青い痣が何個も出来た。

いつの間にか私は疲れていた。気が付けばもう、産もうとする気持ちはなくなってしまうていた。

ミーに気付かれないように病院に行き、予定の日が来るとさっさと終わらせたつもりだった。

気付いたのは手術を終えた後、家に帰ってからだだった。あれだけ殴った腹部を触ると、喪失感に気付いた。

——私は、殺したのだ。重荷だったからって。人を。人の形をした、“命”を。

ミーが帰って来た時、私は錯乱状態だった。

驚きながらも私を押し付けようとしたミーに、「出て行って」と何度も繰り返して言った。

「人殺しなのよ、わたしたち。人殺しなのよ」

泣きながらも狂いながらも何度もそう叫ぶ私を見かねた彼は、少ししかない荷物をまとめ始めた。

そうされると、その様子をただ見ているしかなかった。

数年前、長い間会っていなかった父と母がそれぞれ訪れ

て、黙々と荷物の整理をしていたのをただ見ていた時のように。

「僕、面倒なのは嫌いなんだ。今までありがと。ここは心地良かったよ。おままごとみたいで」

ミーはそう言って、扉を開けて出て行った。

一人残された私は、部屋の真ん中で座り込んでいた。ひとりだった。私は。世界で、ひとり。

——そのまま夜が明けて朝の光が入ってきた時、私はミーを拾ったあの街に向かっていた。

“夜も眠らぬ街”と呼ばれるこの街も早朝は閑散としていて、仕事帰りのホストとカラスが同じ色を纏って歩いている。

大通りの真ん中で私は止まった。車は来なかった。街は青い闇から朝の白い光に、包まれるところだった。

そして光が現れても、そこに私はひとりだった。

遠くの方で誰かが歩いているように見えても、私はひとりでしかなかった。白い闇の中だった。

そこが明るくても暗くても、自分がひとりだったらそこは闇だった。白い孤独。

——私にとって、家の中は闇だった。誰も助けには来

てくれない場所。

——そんな場所で一体、何を望んでしまったのだろう。

そのまま私は、街を歩き始めた。道端にいるホームレスも動き始めているのを見かける。

——きつと明日には、この街を動かす名もない歯車の一つに私もなっているだろう。